

審 査 結 果 の 要 旨

報告番号	甲 第 1332 号	氏名	田中 秀
審 査 担 当 者	<div style="display: flex; justify-content: space-between; align-items: flex-start;"> <div style="text-align: center;">主 査 渡部 正一</div> <div style="text-align: center;">(印)</div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-between; align-items: flex-start;"> <div style="text-align: center;">副主査 安部 尊思</div> <div style="text-align: center;">(印)</div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-between; align-items: flex-start;"> <div style="text-align: center;">副主査 佐藤 公昭</div> <div style="text-align: center;">(印)</div> </div>		
主論文題目：Functional and Structural Outcomes After Retears of Arthroscopically Repaired Large and Massive Rotator Cuff Tears (腱板大・広範囲断裂における鏡視下腱板修復術後再断裂例の機能・構造的評価)			

審査結果の要旨（意見）

肩関節腱板大、広範囲断裂は、現在保存的治療を含めて様々な治療が行われているが、それらの治療成績については一定の見解が未だに得られていない状況である。また、本論文の研究対象である鏡視下腱板修復術は、低侵襲な治療法として広く普及しているが、術後の肩関節の構造及び機能についての総合的な評価は未だに不十分である。このため本研究は、肩関節腱板大、広範囲断裂における鏡視下腱板修復例の内、再断裂を起こした症例について検討を行っている。研究結果では、術後に再断裂した例においても、術前と比較して画像所見において腱の遺残部面積の増大および可動域改善が認められ、構造及び機能結果の相関関係が認められた。本研究で得られた知見は、肩関節腱板大、広範囲断裂における鏡視下腱板修復術の適応および治療予測について重要であると考えられ、臨床における重要性は高い。

以上より申請者は博士の学位を得る資格があると判断される。

論文要旨

大・広範囲断裂における鏡視下腱板修復術(以下 ARCR)例では機能的に成績良好および、術後再断裂や脂肪変性などの不良な症例がともに報告されている。しかしながら、術後の機能、構造ともに評価した報告は少なく、今回我々は ARCR 症例における臨床評価および画像評価を行い、臨床成績の係性について検討を行った。大・広範囲断裂に対して ARCR を行った症例 196 例のうち、再断裂を起こし、術後 2 年の経過観察が可能であった症例を対象とし、最終的に、39 例 39 肩を対象とした。臨床評価は UCLA スコア、JOA スコア、VAS スコア、関節可動域および筋力を用いて行った。画像評価は MRI で術前、術後の冠状面での断裂幅、腱付着部の残存しているサイズ、また GFDI を用いた脂肪変性の評価をした。結果は、UCLA スコア、JOA スコア、冠状面での断裂部サイズ、腱付着部残存エリアのトータルスコアが術前、術後で有意差を認めた。術後 24 か月の腱付着部残存エリア、JOA/UCLA スコア、術前 GFDI に相関を認めた。ARCR 部分修復例では、残存腱付着部は術前より術後 6 か月で有意に拡大しており、それ以降も維持していた。術前 GFDI、腱付着部残存エリア、臨床成績に相関があり、再断裂を起こしたにもかかわらず、臨床成績が改善する原因のひとつと考えられる。